



志を繋ぐ

情報工学科 國井 洋臣

冬休みの間に、一冊の本を読む機会に恵まれた。戦争責任を明言して全国でただ一人自ら判事を退官した金子正則さん。後に香川県知事を24年間務めた人物である。私が子供の頃から、東京に就職をした後も長く知事であったことを記憶している。当時、黒塗り自動車を嫌い、ゲタ履きに自転車で大好きなコーヒー店に通う姿はよく知られていた。平成八年に没した後、業績と人物を偲んで、有志の方々が協力して金子正則先生顕彰会を設立し、昨年末にハードカバーの装丁も立派な300ページの伝記「高志低居 金子正則の生涯」を出版した。非売品であるが、図書館等には献本されているとのことである。また、昨年春には縁の深い丸亀の城北小学校南の公園の中に顕彰碑が建立され、この石碑の中には建立のための浄財を寄せた千三百名余りの有志の方々の名前が記された木簡が収められ、千年後の開扉を待っていることが書かれている。何とも壮大な話である。

高志低居とは「志は高く、暮らしは質素に」の戒めで、香川用水、瀬戸大橋、道路網の整備など、戦後の香川の礎を作る中でこの戒めを实践された。

また、特に郷土を愛し、文化面や教育にも熱心であり、人の輪こそ財産と、学校等の講話では、「青くすんだ広い大きいものがある。それは海だ。さらに大きいものがある。それは空だ。更にそれより大きいものがある。それは人の心だ。」

俳優森繁久弥の詩の引用であるが心の大切さ大きさを若い人たちに訴えたこと。

そして、「お義理で、理屈で世の中を渡ってはいけない。体当たりで心と心でぶつかってこそ本当のxxxができる」とも書かれている。

本校には、木村奨学会という奨学金制度があり、高学年で各学年二人が奨学金を受給している。奨学会理事長木村壽雄氏は、金子氏を人生の師として尊敬し慕っておられ、郷土の学生のために私財を投じて奨学会を設立した方で、この顕彰会では中心的な役割を果たされている。

先人の偉大な人たちの行動や考えは、多数の

人々に様々な影響を与えている。人の心を豊かにし、これからも脈々と継承されていくものと信じている。



我が読書遍歴について

電子制御工学科 永井 久

愚生が学生時代から社会人に成長した時代において、どの様な読書をしてきたかについて退官の機会にあたり回想してみよう。まずある程度の文字が読める小学生時代には、父が姉弟のために毎月「小女クラブ・小年クラブ」を講読して下さった記憶がよみかえってくるものの読書よりも付録の作品、例えば、ピンホ ルカメラ、ぼうえん鏡や金閣寺のモデル等を熱心に組立てる事に興味があった様です。しかしながら、当時の漫画で名作の「宝島」、「ああ無常」や「三銃士」を読んだ事を覚えています。小学生高学年では読書よりもむしろ野球に熱中した小年時代であった感がいたします。

中学時代には国語の藤田重次先生から口語と文語の文法を教わり、夏目そう石の「坊ちゃん」を始めて読みその感想文を書いたり英語の庄野先生の授業では「イソップ物語」を教わった事が記憶に残っております。中学時代は高校進学のための読書に関しては特別な印象がなかった記憶がします。藤田先生の影響のお陰で読書、美術や博物に興味を持つようになった節がある様です。また、3学年のクラス担任の中川虎雄先生からは、毎日のホームルームの際にクラスの生徒が変わる変わる司会をして「教訓の読物」を読み、読物の感想について司会者がお話するという貴重な経験をしました。この件は「君達は社会に出た際に、きっと自分の考えを発表したり、意見をのべる機会が生じる、そのための経験として欲しい」との親心で、今でも中学時代の思い出として強く心に残っています。アメリカでは「Show and

「T e l l 」が小年時代から行なわれるために、その経験で学生や社会人になって人前で自分の意見をのべたり「P r e s e n t a t i o n 」をするのが非常に上手である。

高校生になってから、父が毎月購読していた「文藝春秋」「オ ル読物」「週刊読売」を拝借して読んだり、文豪である夏目そう石、森おう外、芥川竜之介の名作を散読し、芥川賞作家である遠藤周作、石原慎太郎、大江健三郎や直木賞作家の松本清張、山本周五郎、司馬遼太郎の作品に興味をもって読んだのも高校時代で今でも鮮明に記憶に残っている。大学生時代には特に哲学書や随想全集に興味を持ち始めた時代で、よく大阪の日本橋、難波、梅田の古本屋通いをして、立読みをしたのが懐かしい。

社会人となって京都大学に勤務するようになってからは、通勤時間が長かったために高校時代からずっと読んでいた文藝春秋、単行本や新聞等を電車の中でよく読んでいた。特に文藝春秋に書かれた随筆の筆者は名文家ぞろいで、朝日新聞のコラムの「天声人語」と似かよっていて、その上非常に教訓とウィットに満ち溢れた文章が多く、特に好きでもあり、現在も毎月そのコラムだけは必ず読む習慣が続いている。

学生の町である京都市では出版会社や種じゅの本屋さんが多く、夏季や秋季には古本市がお寺の境内で開催されるのが慣例で有名でもある。毎年この機会には、自分の研究に役だつ専門書、興味のある美術書、単行本を立読みしてこれらの書籍を漁るためによく通ったのが懐かしい。

また、種じゅの学会会義のために始発の新幹線や夜行バスで上京して、東京駅から上野駅に直行して、上野の森にある都立美術館、西洋美術館、東京博物館や平成館等で開催されている展覧会を見てから会義に出席し、神田神保町に会場が近かったために会議が終わり次第、もしも時間が許されるならば、時どきは古本屋街巡りで立ち読みをして書籍を漁った事が遠い思い出として残っている。社会人となってからは研究のために内外の学会誌、学術書、専門書を読む機会が非常に多く、本校に赴任してからも学会誌編集委員として学会誌を精読することが続いている。従って自分が読みたいと思っている書籍を読む時間が少ないのが甚だ寂しい。

この度、我が読書遍歴について自分の経験を踏

まえて小文を書きましたが、読書は場所を選ばず、その気になれば何処でも自由に本を読むことが出来る。しかしながら、毎月発刊される書籍が膨大であり、どの様な本を読むかの選択に迷わされる。また読書の仕方には、読むスピードとそこに書かれている内容が理解出来る能力も非常に大切であり、これらは読書と言う経験を積み重ねることにより自ずから達成されるものと確信できる。学生時代は自由な時間が一番多い時代でもあり、学校の授業で直接に関連した書物を読む以外に読む意欲があれば幾くだけでも読書は成就されるはずである。

読書はただ単に知識を高めるばかりでなく、その人の感受性を研くことにつながる。